日本農業研究所研究報告『農業研究』第38号（2025年）p. 413～423

（特別寄稿）

田中芳男著『動植鉱物字林上・下』を読む
～なぜ稀覯本なのか、酷似する『皇国産物誌略』との関連は～

西　尾　敏　彦

1　はじめに

公益財団法人日本農業研究所の地下にある図書室は蔵書が豊富で、老後の私がゆっくりと時間をかけて農業・農村に関する先人達の記録を探索するには絶好の空間である。

ごく最近、その図書室で和綴じ手書の古びた稿本を見つけた。

田中芳男著『動植鉱物字林上・下』である。

同所の図書目録によると発行年は1870年10月、頁数は上35丁、下32丁。１丁は２頁だから70頁と64頁、厚さ各１㎝程度の袋とじの薄い冊子である。次頁に写真１を示したが、上巻１丁（頁）に明治三年庚午十月の田中芳男署名入り緒言がある。

わが国農業の近代化の父、田中芳男の著書については、すべて既存資料[1)～5)]に記録されていると思っていた。しかしこれはどの資料にも見当らない。試みに主な図書館に当たってみたが、そこでも見当たらなかった。珍しい、これは“稀覯本では”と興味を持ち読んでみた。

2　著者の田中芳男（とくに本書執筆前後の）について

まず著者の田中芳男、とくにこの書を刊行した当時の彼の状況である。

田中は幕末に南信濃飯田で生まれた。長じて名古屋に出て尾張藩伊藤圭介に師事、「本草学」を学ぶ。文久元年（1861）、幕府の蕃書調所に招聘出仕した伊藤圭介に随伴して出府。蕃書調所～洋書調所で文書の解読に当たる一方、次々に伝来した西欧の農作物の導入・栽培を担当した。

慶応３年(1867)のパリ万博には自ら採集した昆虫標本を携えてパリに赴き、日本館の準備に当たり、合間に植物園・動物園に足を運んで見聞を広め、帰国時に多くの書物・有用動植物を持ち帰り、わが国農林水産業の近代化の足がかりを築いた。

明治になると新政府に重用され、舎密局（現：京都大学）創設の御用掛（事務局長）としてその創設に当たる。明治３年（1870）には東京に戻り大學南校（現：東京大学）に出仕、明治５年（1872）には湯島聖堂でパリから持ち帰った書籍・動植物の博覧会を開催した。田中が本書『動植鉱物字林上・下』（以下『字林』という）を執筆したのはこの間の時期のことである。

田中が農林水産業と関係を持つようになるのはこの直後からで、明治８年（1875）勧業寮農学課長として農学校（現在の東京大学農学部）設立を具申、明治14～15年（1881-82）には大日本農会などいわゆる３会の創設に関与、明治35年（1902）には東京高等農学校（現：東京農業大学）初代校長に就任している。

本稿では農林水産業に関与する前の田中の今まであまり知られていなかった『字林』を読むことで、彼の目を通して見た明治初頭のわが国の動植物、分けても農業動植物の栽培・飼育状況を思い描き、さらにその延長線上に見えてくる明治初頭のわが国農業・農村の情景について考えてみたい。

３　『動植鉱物字林上・下』を読む－透けてみた明治初頭の農村風景

まず『字林』の紹介だが、写真１に表紙と序文を稿末に掲載されている主な動植物名とその説明文をアイウエオ順に並び換え、【資料】として添付した。

読んでみると、緒言の冒頭に「皇国産物ノ中其最有名ナル者ハ先ツ米穀　紙　蚕糸　茶葉……、今之ヲ植物門　動物門　鉱物門ノ三大科ニ区別シテ其概畧ヲ挙ク」とあり、植物382種、動物192種、鉱物74種の名称とそのごく簡単な説明がある。書名のとおり、身の回りにある植物（上巻）動物・鉱物（下巻）を取り上げごく簡略に解説したもので、種の存在をリストアップしただけのまさに“字”林である。後日、内容を充実するつもりでいたのではないだろうか。

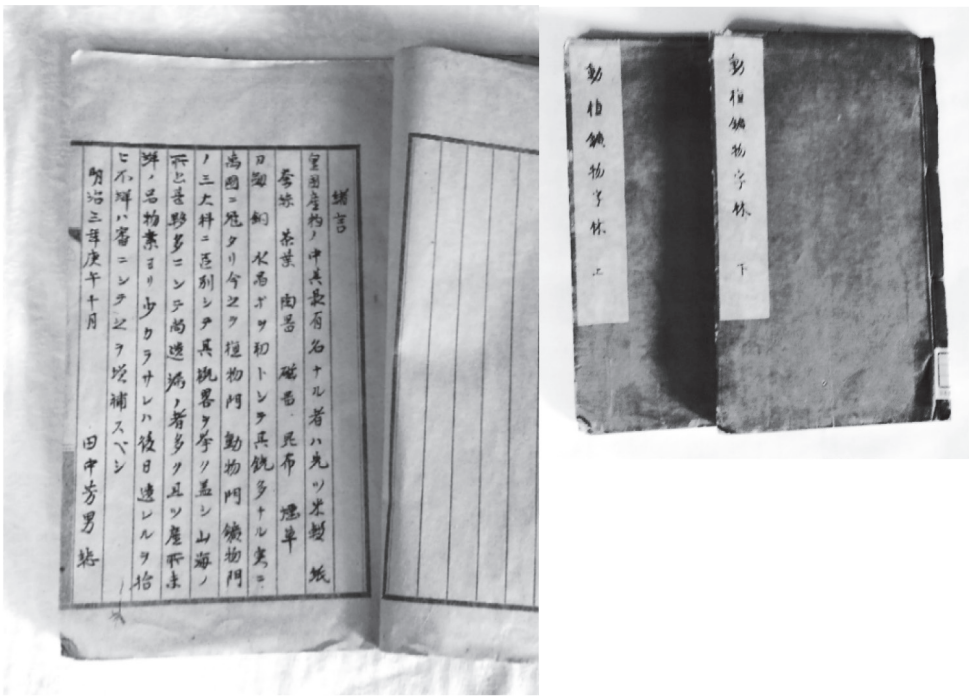

写真１『動植鉱物字林上下』、表紙（右）、冒頭にある緒言（左）

【植物門】：

〈内長草木と外長草木〉注目したいのは、植物門が「**内長草木**」76種と「**外長草木**」271種に２分されていることである。この時代まだ「植物」という術語は一般的でなく「草木」と言ったようだが、〈内長草木〉には竹・稲・旱稲（はたけいね）（陸稲）のほか大麦・小麦・蒟蒻・葱など、〈外長草木〉には桑・楮（こうぞ）（カミノキとフリガナがある）・馬鈴薯・蕃藷（さつまいも）・南瓜・苺・林檎・梨・桜桃・葡萄などが分類されている。それぞれに分類された草木名から推察して、〈内長〉は国内に定着して年数の長い草木、〈外長〉は導入されてまだ日の浅い草木と推測したが、疑問が残る。

もちろん本書は“字林”であって“農書”ではない。それを承知で、あえて当時の農業状況を思い浮かべながら読んでみると。

〈主食用草木〉稲については、さすがに記述が多く「諸国一般水田ノ作物也　上品ハ美濃、播磨並尾張三河遠江駿河ナリ　干シ飯ハ河内道明寺酒ハ摂津ヲ上トシ酢ハ兵庫ノ名産ナレドモ又紀伊尾張ニモ名産アリ」とあり、干し飯・酒・酢の産地にまで及んでいる。

これに対して**旱稲**（陸稲）は「諸国水ニ乏シキ地ニテ作ル～～～」、**大麦は**「諸国一般ニ作ル 但多少アルノミ 羽州秋田名産也」とやや素っ気ない。**小麦・裸麦**はさらに簡単で「同前（前項ニ同ジ）」とまったく素っ気ない。麦類は古くから日本農業には欠かせない主食作物であったが、少なくともこの時代の田中の目にはそれほど重くはみられていなかったのだろうか。

それに対し、いかにも本草学者らしいのは生活資材や薬草の項である。

〈生活資材用草木〉現在の農村ではほとんど見かけなくなった工芸材料用・染料用など「生活資材作物」が多く登場し、しかも丁寧な説明がつく。

まず**竹**　細工用はもちろん、食用・建築資材用と当時の生活に欠かせなかった**竹**は内長草木の冒頭に登場する。最近は需要が減り竹藪も少なくなったが、当時は米麦同様、竹は生活に欠かせない「草木」だったのだろう。

ロウソクの原料の**櫨**、繊維の**麻**、工芸に欠かせない**漆**、紙の原料の**楮**と**黄蜀葵**も説明が長く、それぞれの産地まで記されている。九州に今も残る櫨の並木は往時のロウソク文化の遺産なのだろう。

行李の原料**杞柳**も但馬の特産として詳述されている。**木棉**についてはとくに詳細で寒冷地を除き四国中国東海の諸国、河内和泉・紀伊までと広く作られていたことが紹介されている。食用作物と同様、紙・棉などが重要作物であったことがわかる。

染料として欠かせなかった阿波の**藍**・東北の**紅花**、東北・薩摩・讃岐の**紫草**についてもその生産地まで詳述している。中でも**藍**については「諸国ニテ作レドモ阿波最モ多シ」とある。徳島の藍は今も昔も大切な特産物である。

もちろん**養蚕**に欠かせない**桑**についても説明は詳細で「東北諸国蚕ヲ養フ地ニ作ル卽陸奥上野下野……」と全国の地名があげられ、「其他尚諸国ニテ作ル」とある。幕末から明治にかけて急速に発展した養蚕大国の足音は既にこの時代から高くなっていたようだ。

〈薬用草木〉漢方薬用植物も多い。もちろん著者の田中が本草学者であったからだろうが、**甘草・黄芪・黄檗・塩膚木・山薬**（ジネンジョとフリガナがある）など。それぞれの生育環境・産地まで、より詳細に紹介されている。後述の**茶**もそうだが、人々が食用作物同様に大切に育て重用していたことが伝わってくる。

〈野菜〉今もそうだが、**蒟蒻・葱・茄子・牛蒡・南瓜**は庶民の食の中心にあっ

たようだ。「諸国ニテ作ル」とある。**苺**は「和蘭陀苺実大ニテ美味也」とある。この時代、苺はまだ在来種だが、田中はパリで西洋苺を食べていたのだろう。

さすがと思うのは**藜菜**（フダンソウ）で「近年西洋ヨリ砂糖ヲ製スル品渡ル　未タ糖ヲ製スルヲ聞カズ」とある。フダンソウの同種、**てん菜**がわが国ではじめて栽培されたのは明治３年（1870）、当時の民部省の新宿勧業試験場ではじめて砂糖原料としての試作栽培を試みたのが最初である。てん菜から精糖する官営工場が北海道に建設されたのは明治12年（1879）だが、それ以前のこの時期に、田中はフダンソウが甜菜の同種であることを認識し、その栽培と製糖業の発展を夢みていたのだろう。

〈果樹〉 この時代、**柿**がもっとも身近の果物だったのだろう。美濃信濃から九州にかけて全国各地の名産地が紹介されている。産地化も各地で進んでいたようで、**葡萄**は「甲斐ノ名産」、**梨子**（ナシ）は武蔵下総相模甲斐〜〜などに名産アリ」とある。山梨のブドウ、神奈川・千葉のナシはこの頃には既に産地として名を売っていたのだろう。

今ではあまり聞かないが、当時は「園養」という用語があったようで、**林檎**（まだ和リンゴだろうが）では武蔵・甲斐・信濃で、**李**（スモモ）**・桜桃**でも諸国で「園養」が登場してきている。この時代、各地で産地化・果樹園栽培が多くなってきていたのだろう。

〈茶〉 古くから日本人の生活に欠かせない**茶**はさすがに産地が列記されていて、山城を筆頭に、今も続く全国名産地が羅列されている。それだけ古くから人々に愛され、長い年月それぞれの地域環境に合わせて好みを選択、手をかけて作り続けられてきた証だろう。こちらは「培養」と記されている。

【動物門】：

〈獣の部〉 **牛**は「大小アリ諸国ニテ畜養シ運輸ニ用ユ」、**馬**は「諸国一般有用ノ畜獣ナリ」などと、全国各地で広く農耕用に飼育されていた。「牛肉ハ肉食中最第一ノ品」とある。この時代、既に牛肉食はかなり普及していたのだろう。

興味深いのは**豕**（ブタ）で「長崎ニテハ往年ヨリ畜ヘトモ其他ハ近年ヨリ畜※ムル也」とある。江戸末期の「牧畜雑誌」に1664〜1691年に中国人が豚を長崎に輸入したとあるが、肉食解禁は明治４年（1871）のこと、南九州・沖縄の黒豚を除き、飼育はまだ限られていたのだろう。「**豕**」の字に月編（にくづき）がな

いのはそのせいかも。

ついでながら。今では「絶滅」といわれている**犲狼**（日本狼）も、この頃はまだ生存していて「諸国深山ニアリ」と記されているのが哀しい。

〈虫之部〉蚕については「陸奥・両野・武蔵・相模・甲斐・信濃……」と、全国各地の主な産地が羅列されている。横浜港開港（1859年）で生糸の輸出が盛んになり、村々でも養蚕が盛んになり、養蚕大国日本が生まれつつあった時期である。「近年之ヲ養フノ地年々多シ」とあるのはまさにそのことだろう。

蜜蜂については、明治政府勧農寮が西洋蜜蜂を小笠原に導入したのは明治10年（1877）だから、もちろんこの時代の蜜蜂は日本蜜蜂である。西日本各地に産地が形成されているが、養蜂発祥の地とされる紀伊熊野が第一とある。

以上のように、字林を読んできたが、読み終わって、次のような想いが深く心に残ったことを記して置きたい。

本書が『字林』であり著者が本草学者であることを承知の上でなお思うのは、幕末から明治のはじめにかけての当時の人々がいかに身の回りの自然を大切に想い、いかに親しくつき合っていたかということである。それぞれの草木に列記された「産地」の数をみても、そのつき合いの深さが想像できる。この時代の人びとにとって草木は稲麦など食用の草木だけでなく、薬用・生活資材用など、すべての草木が人々の生活に密接に結びついたまさに“共生”の伴侶であったのだろう。

4　『動植物鉱物字林上・下』と『皇国産物誌略』の関係

ところで、この『字林』だが。前述したように「田中芳男君七六展覧会記念誌」を見ても、田中の著書に詳しい　みやじましげる（1983）『田中芳男伝』、田中義信（2000）『田中芳男十話』をみても、この書名は見当たらない。ただ牧野富太郎（1935）『植物随筆』[6)]には「田中芳男先生の『動植鉱物字林』にも……」と引用があり、頒布されていたことは間違いないようだが。

興味を惹くのは、この本が刊行された同じ明治３年（1870）に『皇国産物誌略』という稿本が刊行されていることである。そこでこれを所有する東大図書館にお願いしてコピーし確かめてみた。

写真２に、東大所蔵の『皇国産物誌略』（以下『誌略』という）の緒言とそのさらに前頁に添付された田中の添書きの頁を示した。

写真１の『字林』と対比してみると、藍色の表紙が黄色に変わって、緒言２行目「蠶」が「蚕」になり、茶葉と漆器の間に漆器が追加、３行目の銅が消えているなど若干の違いはあるが、その他はすべて同一である。緒言の前頁にある明治21年11月18日付けの添書き（写真２右）には、この『誌略』は久保喜三郎筆記のもので、博物館が所蔵していたものを田中が植物部に新たな草木を追加し、一部動植鉱物の順序も差し換えたものとある。

本文をみても、やはり産物は【植物門】【動物門】【鉱物門】に分けられ、【植物門】には〈外長草木〉〈内長草木〉の２グループがある。『字林』刊行後、ごく近い後日に書き換えられたのではないだろうか。明治３年刊の『誌略』が手に入らないので対比できず疑問は残るが、『誌略』は『字林』の改訂版ともいうべき書ではと推測される。だとすると、『字林』が稀覯本である理由が説明できるのだが。

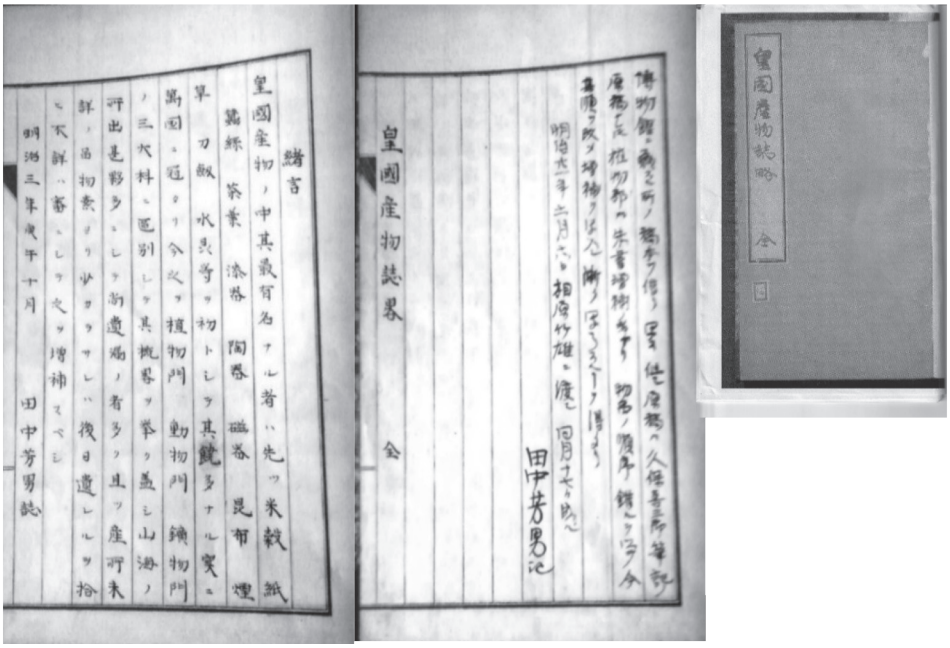

写真２　『皇国産物誌略』、表紙（右）、緒言（中）、その前頁の添書き（左）

5　『字林』の意義

それにしても田中は明治３年（1870）の『字林』『誌略』、明治21年（1888）の『誌略』と、何故半ば未完成とも思える書を矢継ぎ早に刊行したのだろうか。

『字林』の序文末尾には「尚遺漏ノ者多ク且ツ産所未詳ノ品物素ヨリ少カラサレハ後日遺レルヲ拾ヒ不祥ハ審ニシテ之ヲ増補スベシ」とある。明治３年（1870）のこの小著書を起点に、植物だけでなく動植物・鉱物を網羅した大事典の編集を夢みていたのではないだろうか。

明治24年（1891）８月、田中は後輩の小野職愨と共著で『有用植物図説』を大日本農会から刊行した。目録１冊・図画書３冊・解説３冊、色彩豊かな多色刷り和綴じの大作で、その冒頭の自序には「此書ノ編輯ヲ企テシ起源ヲ挙クレバ明治三年太政官ノ命ニヨリ皇国産物誌ヲ著シ十月之ヲ官ニ出タス　其書タル動植鉱物ノ世用アル者ヲ羅列シ産地其他ノ略説ヲ附スル者ナリ」とある。

明治３年（1870）の『字林』『誌略』の発表から明治24年（1891）の『有用植物図説』の発刊まで20年の年月が経過し、動・鉱物は抜けたが、これが本草学者田中の終着点で、農林水産学先駆者田中への飛躍点でもあったのだろう。

『字林』がその原・原点であったと意義付けるのは、著者の思い過ごしであろうか。

6　おわりに

最後に、わが国農学の大先達「田中芳男」と著者の接点となった若干の私事を述べて終わりたい。

冒頭に記したが、田中芳男は南信濃飯田、現在の長野県飯田市の生まれである。実は、私も同じ飯田の生まれで、しかも同じお寺の檀家、田中家の墓地はわが家の墓地のすぐ隣にあった。昭和22年（1947）の大火後、墓地はすべて撤去され今はないが、「パリ万博」から帰国した田中が先祖のために建てたという有名なエジプトのピラミッド型の墓は、少年時代の際の私のよき遊び場であった。不尊にも高さ２ｍほどのピラミッドに駆けのぼり墓石にしがみついて

遊んだことが今も私の懐かしい記憶である。私が田中に親しみを持ち、追慕してきたのは、その日の体験の延長なのだろうか。

参考文献

1）大日本山林会編（1913）「田中芳男七六展覧会記念誌」大日本山林会
2）村沢武夫（1978）『近代日本を築いた田中芳男と義廉』秀文社
3）みやじま・しげる（1983）『田中芳男伝、なんじゃあもんじゃあ』田中芳男・義廉顕彰会
4）田中義信（2000）『田中芳男十話』田中芳男を知る会
5）田中義信（2006）「近代農学の創始者・田中芳男の生涯と事蹟」『昭和農業技術への証言Ⅴ』農文協
6）牧野富太郎（2002）『植物随筆』講談社
7）西尾敏彦（1998）〔論壇〕田中芳男と「技術学理相切シ相進ム」『農業』第1373号：４～５．大日本農会

添付資料

アイウエオ順 **田中芳男（1870）『動植鉱物字林』の抜粋**

（ ）内数字は、原著に採録されている種の総数

※は判読不明の文字

◎植物門（382）

○海藻之部（19）

○芝※之部（10）

○羊歯之部（６）

○内長草木之部（76）

稲　諸国一般水田ノ作物也　上品ハ美濃、播磨並尾張三河遠江駿河ナリ干し飯は河内道明寺酒ハ摂津ヲ上トシ酢ハ兵庫ノ名産ナレドモ又紀伊尾張ニモ名産アリ

旱稲（ハタケイネ）　諸国水ニ乏シキ地ニテ作ル　東京辺ニテ多ク作ル

芋　品類多シ　諸国ニテ作ル

大麦　諸国一般ニ作ル　但多少アルノミ　羽州秋田名産也

小麦　同前

黍　諸国一般ナレトモ常陸辺其外日向大隅水田ニ乏シキ地ニ於テ多ク作ル

粟　同前

蒟蒻（コンニャク）　常陸辺並美濃辺ヨリ多ク作リ出ス　此外諸国ニテ作ル

甘蔗（サタウタケ）　暖国ニテ作ル故ニ四国九州殊ニ薩摩並ニ紀伊、三河遠江駿河等ニ於テ作ル　寒国ニハナシ

龍爪稗（シコクヒエ）　山野多キ諸国ニテ作ル　風雨旱湿ニ強

山薬（じちんじょう）　諸国ノ山林自生多シ駿※名産ニシテ之ヲ乾カシ末シ寒製山薬トシ出ス

茊芋（シチトウ）　南方諸国ニテ作ル　殊ニ豊後ヲ名産トス　最上品ハ薩摩ヨリ出ス

竹　品類多シ　南州ニ多ク北地ニ少シ竹細工ハ摂津有馬並駿河名産也

葱（ネギ）　諸国ニテ作ル　名産ハ武蔵上野下野信濃美濃等ニアリ

稗　諸国一般ナレモ、常陸辺其外日向大隅水田ニ乏シキ地ニ於テ多ク作ル

○外長草木之部（271）

藍（アイ）　諸国ニテ作レトモ阿波最多シ　其外山城摂津ヨリ出ス山藍ハ諸国ノ山ニ産スレトモ紀伊ニ多シ　薩ヨリ出藍玉ハ染テ洗ヒ色消ズト云

麻　諸国ニテ作ル上野名産也　薩ヨリ出ス上品也

苺（イチゴ）　品類甚多シ　諸国ノ山野ニ自生ス　木本ノ者実皆食スヘシ　※本ハ食フニ堪和蘭ヨリ伝ハル和蘭陀苺実大ニテ美味也

桜桃　諸国ニテ園養ス

黄氏（オウギ）　自生ト園生トアリ大和信濃下野日光加賀～広島讃岐等ヨリ出ス

柿　山城大和近江美濃信濃甲斐其外丹波安芸並九州辺等諸国ニ名産アリ　黒柿ハ秩父及信濃ヨリ出　信ノ之方ハ軟也

楮（カミノキ）　諸国ニテ作リ出ス　殊ニ長門周防石見土佐日向豊後越前信濃播磨摂津等ヨリ出ズ紙安芸広島周防岩国半紙上品也

南瓜　諸国ニテ作ル東京四谷ノ産ハ小クシテ扁ク西京ノ種ハヘウタン形ヲ為ス何レモ味美也

甘草　大和甲斐駿河富士陸奥等ヨリ出ス

草棉（きわた）　寒国ニナシ四国中国東海ノ諸国及大和河内和泉紀伊等ニテ多ク作リ諸国ヘ出ス綿布ハ豊前小倉ノ類上品也河内木綿

桑　蝦夷ニ自生ス　東北諸国蚕ヲ養フ地ニ作ル　即陸奥上野下野武蔵相模甲斐信濃美濃飛騨丹波但馬ラ其他尚諸国ニテ作ル

牛蒡（ごぼう）　山城越前武蔵下野常陸陸奥佐渡伊勢伊予筑後大隅其外諸国ニテ作ル

杞柳（コリヤナギ）　但馬ニテ多ク作リ栲栳ハ製シ出ス但シ縁縫ハ大坂ニテ多クナセリ

蕃藷（サツマイモ）　寒地ニテハ養ヒ難シ東南ノ諸国一般ニ作ル　東西二京ノ辺ニ多シ　又九州辺稲田ニ乏シキ地ハ多ク作リテ糧トス

馬鈴薯（ジャガタライモ）　原ト舶来ニテ初メ九州ノ地ニ植ヘ後相模甲斐等ニテ作リ方今ハ諸国作ル所次第ニ多シ　協救社称用スル所ノアハスクイモ是也

西瓜　品類色々アリ原ト南方産ナレハ東南ノ地ニ宜シト雖又北地ヨリモ出ス故ニ薩摩紀伊伊勢並両総安房陸奥常陸山城出雲筑前讃岐其他諸国ニ出ス肥前神崎辺ニテヨク出来ル

茶　山城ノ三国ヲ最上トス其外近江信樂大和摂津丹波但馬播磨美濃伊勢尾張駿河遠江伊予筑前日向等ノ諸国ノ外培養スル所次第ニ多シ

黄蜀葵（とろろあおい）　諸国ニテ作ル殊ニ紙ヲ製スル地ニテ多ク作ル

梨子（なし）　武蔵下総相模甲斐並美濃近江其他諸国ニ名産アリ

枇杷　諸国ニテ園養ス甲斐ニテ多ク作ルタウビハト唱スル品大ク枝小ク上品也

葡萄　甲斐ノ名産也　其外諸国ニテ作レルモ品劣レリ吐方ニ用ユル瓜帯ハ越前ノ名産也

藜菜（フダンソウ）　諸国ニテ作ル 近年西洋ヨリ砂糖ヲ製スル品渡ル 未タ糖ヲ製スルヲ聞カズ

葫芦（ヘウタン）　品類多シ 東南諸国ニテ作ル肥後ニハ色々細工物ヲ出ス名産也

紅花（ベニハナ）　出羽陸奥ヨリ多ク出ス其外東京近江和泉紀伊肥後等ニテ作ル

紫草（ムラサキ）　園生と山生トアリ　上品ハ陸奥南出羽最上及薩摩ヨリ出ツ又讃岐ヨリ出ツ

柑　東南諸国ニテ作ル紀伊ヲ名産トス其外駿河遠江三河及肥後八代等ヨリ出ス

林檎　武蔵甲斐信濃摂津等ノ諸国ニテ園養ス

◎動物門（192）

○獣之部（39）

牛　大小アリ諸国ニテ畜養シ運輸ニ用ユ西京ヨリ大津ノ牛車最有名ナリ備前備後及信濃木曾ニテハ多ク子ヲ繁殖セシメ諸国ヘ出ス牛角牛膽牛皮牛蹄等悉ク用ニ供シ殊ニ牛肉ハ肉食中最第一ノ品也　又皮ヨリ阿膠ヲ製ス

馬　諸国一般有用ノ畜獣ナリ信濃甲斐常陸両野陸奥駿河両総等ニテ牧養シ出ス又土佐ヨリ出ス土佐駒小ニシテ力強シト云

狗狼（おおかみ）　諸国深山ニアリ

豕（ブタ）　長崎ニテハ往年ヨリ畜ヘトモ其他ハ近年ヨリ畜※ムル也　脂ヲ薬舗ニテマンテイカト称ス

○鳥之部（34）

鶏　諸国一般ニ畜ヒ卵を以テ食用の允ツ故ニ三都ノ辺ニテ多ク畜フテハ畜フ事少シ長尾鶏ハ土佐ノ名産也

○爬虫類（15）

○魚之部（43）

○介の部（28）

○虫之部（33）

蚕　陸奥両野武蔵相模甲斐信濃伊豆淡路飛騨丹波但馬八丈島ラニテ養フ近年之ヲ養フノ地年々多シ

蜜蜂　諸国山野自生アレ共少シ多ク養ヒテ蜂蜜並蜜蝋ヲ製シ出ス且養フノ地ハ先ツ紀伊熊野ヲ第一トス次ニ安芸其他尾張伊勢丹波丹後但馬出雲石見周防伊予土佐筑前豊後薩摩等也

◎鉱物門（74）